旭川医科大学研究フォーラム 11　：115 ～ 118，2010

追　　悼

郷先生を偲ぶ

藤　田　　智* 赤　坂　伸　之*

郷先生の活動のフィールドはあまりにも多岐に渡っていたため私一人ではすべてを網羅することは難しいと考え、第一外科の赤坂先生と二人で思い出を書かせていただくことにしました。

心臓外科医としての郷先生

郷先生の訃報をお聞きした時は、皆さんも大変驚かれた事と思いますが、私もまさに真っ白になったとしか言いようがありませんでした。それからの数日間の出来事は昨日のことのように思い出されます。このような形で、私が皆さんに郷先生の偉大な業績や、その高潔なお人柄をお語りすることは、大変僭越ではありますが、19 年間、同じ、`術野`で仕事をさせて頂いたものの務めと信じ、‘郷伝説‘の一端を紹介させていただきます。

郷先生は江別の外科開業医の御長男としてお生まれになりました。意外にも、幼少のころは体が弱く、本ばかり読んでいる子供であったと本人はおっしゃっていました。小学校高学年のころからスポーツに目覚められ、特にスキーとバスケットに興味を持たれて、スキーではその後、準指導員の資格までを取られていました。バスケットは中学から始めて、札幌南高時代には全道選抜チームの一員でした。高校３年生の夏に当時の留学制度を利用して、アメリカのネバタ州の高校に留学されました。このときは英語の勉強はもちろんですが、実はバスケットで何とかしてやろうという気持ちがあったに違いないと私は思っております。残念ながらコーチの方針と合わなかったため、アメリカの高校のチームには残れずに気落ちした郷先生は、悪い友達とも付き合って、アメリカならではの経験もされたようです。（数年前、当時のガールフレンドが日本に訪ねてこられました。もちろん奥様も御存じです。）帰国後は北大医学部に入学され、バスケットでは医学部のレベルに飽き足らず、全学でもプレーされインカレにも出場されていたとのことです。卒業後は外科医をめざし、北大第２外科に入局されました。初期研修は、帯広厚生病院で、その時、現在第一外科助教授の稲葉先生と御一緒に研修され（飲み歩かれ）、お二人の御交友はその後も長く続かれていました。北大に戻られてからは、当時の心臓グループの長であった酒井圭輔先生（札幌啓仁会病院）の最新の心臓手術に興味をもたれ､心臓外科医としての道を歩きは始めました。残念ながら北大では思うような研修をする機会がなく、医局の反対にあいながらも、単独で再び留学し、見事にアメリカ心臓外科の最高峰の一つであるメーヨクリニックのレジデントに採用され、そこで心臓外科医としての基礎を学ばれました。メーヨクリニック退職後も、アメリカ各地の病院を歩き回り、勉強されたとのことです。特筆すべきはその時すでに幼馴染であった奥様と結婚されており、お二人の小さいお子さんと一緒に各地を転々とされたそうで、奥様の御苦労はいかほどとかと思われましたが、後にお話しをお聞きすると、「私はアメリカが好きだったので、楽しくて楽しくてしょうがなかった！」とお話しされ、大変驚きました。

帰国後まもなく、久保元学長の御高配により、郷先生が旭川医科大学に赴任されました。ただ、郷先生には晴天の霹靂だったようで、当時の北大の教授から旭川行きの話を聞いて医局に戻ったら、医局員は全員知っていて、知らないのは俺だけだったとよくお話し

*救急部

ていました。本人にとって決して本意ではない人事であったのかもしれませんが、当時 37 歳くらいで、アメリカ留学から帰国間もない郷先生を我々が迎える事が出来たのは本当に幸運でした。

平成 3 年 11 月に郷先生が赴任されましたが、当時の大学では、現在とはまったく違い、学内、学外から心臓の患者の紹介がほとんどない状態で、郷先生にとっては、まさにゼロからのスタートでした。私は平成 4 年から郷先生と一緒に仕事をさせて頂くことになりましたが、今でも忘れられないのは当時小児科の岡先生から、動脈管開存症の患者さんをご紹介していただくことになり、手術自体は簡単におわったのですが、呼吸、嚥下障害を持ったお子さんで術後は大変苦労しました。その後も高度肺高血圧合併の心室中隔欠損症の患者さんなどを救命する事が出来、徐々に信頼を得る事が出来ました。第一内科からの紹介も約 1 年後で、その当時トピックであった、弁形成術を成功させる事が出来、やっと紹介してもらえるようになりました。ただ、人口過少地域にあるという旭川医科大学の立地性の問題や、現在とは違い救急や緊急手術のなどの対応が著しく困難であった当時の大学の事情もあり、症例数を飛躍的に増加させることは困難でした。ただその中で、小児の大血管転位に対する Jattenn 手術や、大動脈縮窄の直接吻合術、新生児の総肺静脈還流異常症の手術などで、数は少なくとも着実に成功を収めることができました。一方その間、名寄を始め室蘭、そして根室の病院で、第一外科関連の施設での開心術の立ち上げに奔走され、全道を走りまわっておられました。郷先生の術者として特筆すべき点は、分業化が進んでいるこの世界で、小児から、成人の疾患はもとより、大血管外科に至るまで多くの分野の手術をされ、それぞれの面で国内の大きなセンターと遜色ない成績を残されたことにあります。特に手術が困難な小児手術症例数は 19 年間でのべ 700 人以上に及び、一人一人が思い出に残る貴重な症例であります。

このような多種類の症例に対応できたのは、どのような緊急手術でも対応できるように、常に新しい情報を仕入れ、手術への準備を怠りなくする、ゆるぎない研究熱心さのたまものでした。さらに、郷先生は手術だけでなく、術後もベッドサイドを離れずに患児に向き合い、徹夜明けでもベッドサイドでうとうとしながら、何か変化があれば、すぐに的確な処置をされていました。後年、後継者育成の面からもご自分が何でもやるのは良くないと考えられたのか、付きっきりになることは止めてられましたが、夜中にこそっと、何度も様子を観に来られ、何かあったらすぐに手助けするという無言のメッセ―ジを出してられました。それは救急部を立ち上げ、部長の重責を任ってからも、その御姿勢は変わっておりませんでした。

一方、国際学会はでは natives speaker と同様の英語を話され、本当の discussion のできる数少ない日本人の一人であり、また多くの英文文献を投稿されておられました。現場で患者さんを第一に考えて診療する姿勢で多数の医師を指導し、学生さん相手にも忙しい合間を縫って、ダビンチコードを英文で読むユニークなご指導されたりするなど、旭川医大で誰よりも忙しい方でしたが、すべての面に手を抜くようなことはありませんでした。

さらに、一時は病院長補佐としても活躍され、問題山積みであった外来を現在の機能的な形にされたり、自ら救急部を立ち上げられと、短期間に多数の患者と救急車が来院して、救命救急センター化を実現させたことなど、語りつくせぬ実績を残されたことは言うまでもありません。そこにはいわゆる医局や大学の従来の枠にこだわらない先見の明と、たとえ対立する関係であってもあくまでも一緒にやっていこうとされる融和性があり、一人の医師としても、指導者としても経営者としても卓越された存在であったことは皆さまがご存じのとおりです。

このようなお仕事ぶりからは　お体を悪くして当然と思われますが、50 歳ぐらいまではバスケットで鍛えた、体育会系の体力を存分に振舞われていました。一転、数年前からはすっぱりと禁煙し、自然な減量をされ、ご健康にも気をつけていらっしゃる様子が窺え、私共も安心していた矢先の出来事でした。

手術中、特に心臓の手術の時は、6-8 時間ぐらいかかる長い手術が多いのですが、本当に集中を要するのは心臓が停止している 2-3 時間です。その他の間は、郷先生はもともとお話し好きであるのか、回りの緊張を和ませようと意識されたのか、術者の時も、助手としてご指導されている時も、よくお話をされていました。郷先生の話題は大変豊富で、ご専門の心臓外科の具体的な技術に関することはもちろん、それに携わる古今東西にかかわる人々の人物論から、留学時代の生

活上での面白い話、国際学会でのいろいろなエピソード（旧体制下のロシアでホテルの部屋を夜中に抜け出しお酒を飲みに街に出た、トルコで白タクにひっかかりそうになった)、宇宙のあり方を始め物理学にも詳しく、中国の古典的な出来事や、アメリカの小説の話などまさに博学多才のお方でした。一方観るスポーツに関しては軽度のヤクルトファンであるくらいであまりご興味はないようでしたが、Ｆ１グランプリだけは例外で、いろいろ話をされるのですが、残念ながらあまり話についていける人がいなくて、もの足りなかったようにお見受けしました。芸能界に関しては全くご興味がないようでしたが、一度だけ、夜中にたまたまやっていたドラマを観られたのか、ポツリと「酒井のり子さんて、きれいだね。」と言われたことがありました。その後の一連の出来事を知らないまま逝かれてしまった郷先生がどのように思われたか、将来是非お聞きしたいと思っております。

郷先生が急逝されてから早や半年が過ぎました。あっという間の半年であったと思います。

郷先生とは、私が旭川医大の麻酔科に呼んで頂いてからのお付き合いとなりますが、はじめは、麻酔科医と、心臓外科医として手術室で、覆布を挟んで、「心臓の張りはどうですか？」などという会話からスタートしたのではないかと思います。郷先生が救急医学講座の教授になられた後で、旭川医大の古い手術室のラウンジで、「先生は救急とか好きですか？」と突然質問されたのが、その後、郷先生の下で働かせて頂くことになったきっかけでした。

郷先生の下で働かせて頂くことになったとき、

郷先生「先生は何をしたいですか？」

藤田「オフジョブトレーニングを広げたい」

郷先生「それは大切なことなのでぜひやって下さい。応援しますよ」

と言う会話があった後は、色々と好きなことをやらせていただいてきました。JATEC と言う外傷初療のコースを北海道で４年以上開いていない状態が続いていたときに、

藤田「このコースは必要と思うのでぜひ北海道で開きたいのですが問題は赤字になると言うことが最初からわかっていることです。」と相談したときには、

郷先生「大事なことなのでお金は気にしなくていいですよ」と言っていただきました。そのおかげで北海道でもコースが開催できるようになり、その後は、旭川医大だけではなく、北海道大学、札幌医科大学とも協力して、毎年コースを開催できるようになりました。

メディカルラリーといって、医療従事者がチームを組んで、色々な課題（外傷、多重傷病者、NBC テロ）に取り組み技能、チームワーク等を競い合う競技会があります。

藤田「チーム医療を意識付けるためにメディカルラリーをやりたいので、先生発起人をお願いします」

郷先生「それはいいことだから引き受けますよ」と郷先生に引き受けていただいてから北海道メディカルラリーは今年第５回目を迎えました。

大規模災害に対して、DMAT (Disaster medical assistant team) と言って、医師、看護師、事務職がチームを組んで、災害の起きていない地域から、災害の起きているところへ応援に行くと言う厚生労働省が取り組んでいる事業があります。

藤田「旭川医大もこれに参加しませんか？」

郷先生「いいね、僕も隊員になるよ」と言っていただき旭川医大にも DMAT チームが出来上がり、今年は、防災の日に自衛隊の飛行機に乗って岡山まで行くほどになりました。郷先生がいらっしゃれば、きっと僕が自衛隊の飛行機に乗るとおっしゃったのではないかと思います。

郷先生が亡くなられてから、色々な仕事を代理としてやらせていただいています。地域医療連携室の MSW の方と色々な病院を回り、患者の受け入れをお願いすることもそのひとつです。忙しかった郷先生がこんなにも色々な病院を回られていたと聞いたときには驚きました。また、ドクタージェットの事業が本年９月に行われるのですが、行く先々で郷先生が提案されていた事業がようやく本格化しました、ぜひ旭川医大もお願いします。と言われます。本学にも救命救急センターが出来上がることになりましたが、これも郷全盛の悲願のひとつでした。色々な問題が山積する中、郷先生であったらどうしただろうかと考えながら仕事を進めていますが、たまには郷先生からお返事がないときもあり、きっと天国でもお忙しいのだろうな

と思っています。この救命センター化推進のために郷先生は北海道等の救急関係の協議会、役員等を色々とされていました。これを全部やっていたの？と思うほど色々なお仕事をこなしていられたようです。色々なところに代理ででると、あちらこちらに郷先生の匂いが残っています。こんなことは郷先生がやられていないだろうと思うような仕事にもやはり郷先生の匂いが残っているようです。

これからは、郷先生の香を探すことが、すなわち色々な仕事を進めていくことになると考えています。先生の夢を我々がひとつでも叶えられるようみんなでがんばりたいと思います。